

第2分科会 東日本大震災を通して

先の震災では被災地各地の保育者が、子ども達を守るために翻弄しました。津波にのまれ先の見えない不安と闇にのまれそうになりながら経験した、体験談を3名の男性保育者が話してくれました。

～未曾有の震災。予期せぬ事に備える為に～

●U先生からは実際の園の避難の様子や町内の火災の様子を画像を使って説明・保育所を再開するまでの道のり、犠牲になった園児について。現在の避難訓練の取り組みから全国の方々への感謝の言葉が話された。

●詳細について

3月11日の地震前までの日常について。避難訓練では経験しない事が続く中、地域住民とともに避難をした事。その中では度重なる余震とともに町内の火災の延焼が広がり、避難したお寺の窓がプロパンガスの爆風で揺れた事。園児は休んでいた子や降園後に3名の犠牲があり、その事から引き渡しの確認や保護者も一緒に避難する事。地域住民と一緒に避難訓練を重ねている事が話された。悲しみを乗り越える事で、同じ悲しみを繰り返さない事・保育者として笑顔を守り続ける事への使命感を高めた。また全国からの厚い支援で交流を広げ深められている事に感謝を伝える。

～私の経験した東日本大震災～

●T先生からは、着任して2カ月での震災の経験。子ども達と一緒に不安な夜を過ごした事。パンクしながらも車を40キロ近く走らせ宮古市の自宅へ帰った事。当時妊娠中であった奥さんとの再会。今後への決意が話されました。

●詳細について

2011年1月より働き始めたばかりでの震災。町内の事があまり分からないままであった。園から徒歩で山田南小学校に避難する。夜になり停電と火災により不安な中、子ども達を不安にさせないようにと励まし続けた事。翌日パンクした車で40キロ近く走り自宅へ帰った事。妊娠中の妻に再開し不安からの解放と安堵感に涙した事を話されました。

～震災の記憶・田老保育所の事例～

●O先生からは、園の概要から震災2日前に起きた地震の際に当初の予定されていた避難場所から変更し、3.11の際もその点が功をそうした事。津波への意識が高く勉強会を行いながら備えてはいたが、職員の移動も重なり少しずつ薄れていた事。地震から避難を開始する時点での子どもへの対応や避難場所についてからの様子。園の再開から3度の引っ越しをかさねて、園舎の再建を目指し日々生活している事。

●詳細について

宮古市田老地区は昔から何度も津波被害にあい、「万里の長城」と呼ばれる防潮堤が町内をまもっていた。その為津波に対する意識が高く、職員で勉強会を重ねシミュレーションを行い、避難場所の検討を行うなど意識の高い場所であった。しかし、職員の移動があった事ですこしずつ意識の変化とともに震災を迎える事になる。地震の時間は午睡時間であった事から避難の際の子ども達の着替えについての判断の差について。園舎が完全に流出した事で田老児童館とともに園を再開・その後地域の集会所・グリーンピア田老・仮設園舎に引っ越しを繰り返した事。ここで話されたのは、環境が整わずおもちゃ等が十分でない中保育者の質が問われた事。保育者個人の引き出しの多さや、なにもなくても子ども達を楽しませられるかが必要とされた。また「はやく日常に戻ってあげたい」という思いから、震災前の活動を多く取り入れ始めた事が話されました。

●質疑・応答について

1 Q.栄養について…食べ物の確保・離乳食をどうしていたのか？日頃準備しておいたほうがいいものは？

A 栄養士がいたのでおつゆを作り、物資でいただいた釜でご飯を作る。

衛生面でいえば100%ではなかったが、出来る限りの消毒を心掛けていた。

食材は分けてもらっていた。

放射能については情報はあったが、正直なところそれほど気にしているときではなかった。

備蓄があったが賞味期限が切れていた。しっかりと確認がひとつである。

2 Q 避難訓練はどこでも行っていると思うが、避難した後どのように過ごす計画をたてているのか？

家族もいて色んな状況のなかで職員体制、仕事を続けていられたのかなど聞きたい。

A 避難後についてどのような災害が起きて、どのような状況になっているのか、常に想定して心掛けている事が課題であると考える。

非常バックに備蓄しておき一晩過ごせるようにすること。

公立では一緒に避難所で対応していた。保育所では以前と同じように過ごしていた。

家庭への心配はどの職員も強く、園長・主任より“帰れる職員は帰す”ことを決めて頂いた。

現在は警報・注意報に応じて、出勤しなかったり職務中は帰らず、子どもの対応をするようにしている。

Q 子どもが震災後にどのような症状が出たのか？対応は？

A 基本的には、取り乱したりパニックになる様子は見られないが、表情が乏しくなる子はいた。

静かに寄り添い見守っていくようにしていた。

●所感・まとめ

それぞれの男性保育士が、園児の命を守るためにそれぞれ持てる全力を尽くした事。誰もが経験した事がない未曾有の災害。誰もがこの巨大な震災の前では無力でしたが、子ども達を不安にさせないように、笑顔を取り戻すために保育者としてそれぞれに動きました。しかし、これは保育者としての使命感や全国の皆さんからの支援や応援・後押しがあったからこそ出来た事でした。今回経験した事をみなさんに話す事で、また起きるであろう災害に対し備え、多くの子ども達の笑顔を守ることへ繋がっていければと感じました。そして震災を経験した事で保育者としての意識と質の向上が必要であると改めて感じました。